



村川堅太郎

地中海からの手紙

中公文庫

中公文庫

©1975

地中海からの手紙

昭和五十年六月二十五日印刷
昭和五十年七月十日発行

著者 村川堅太郎

発行者 高梨 茂

用紙 本州製紙
整版印刷 三晃印刷
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒
104

東京都中央区京橋二丁目一番地
振替東京二一三四

定価はカバーに表示してあります

中公文庫

地中海からの手紙

村川堅太郎著



中央公論社

地図 吉川地図写植工房
表紙・扉 白井晟一

目次

エジプトの驚異……………	9
スニオン岬とアクロポリス……………	16
大学の式典、苔むした観覧席……………	22
ピレウス、エギナ、エレウシス……………	32
冬のエーゲ海……………	42
イスタンブールの四日間……………	50
花に埋もれた遺跡……………	58
オリンポスとデルフィ……………	69
マラトンの古戦場、ローマの一週間……………	79
ローマとところどころ、エトルリアの墓……………	89
ナポリとポンペイ……………	100

ノルマンの古都……………	107
シチリア回遊……………	112
そうぞうしい美術の都……………	123
ラヴェンナ、ヴェニス、ミラノ……………	132
ローマ大学訪問……………	147
オスティアの遺跡、フォルム・ローマヌム、 旗亭“ビブリオテカー”……………	150
リヴィエラの風物、マルセイユ……………	158
パリからマドリードへ、古都トレドの一日……………	165
マドリードの大使館、セゴビア行き……………	175
バルセロナ見物、カイロの想い出……………	184
エスカラの漁村とアンプリアスの遺跡……………	190
スペインの女学生……………	199

地中海再遊、アドリア海からピレウスへ……………	203
夏のギリシア、“ネストールの王宮”を訪ねる……………	208
アルゴス駅の一夜、エピダウロス再訪……………	218
ミケーネへの強行軍、ギリシアよさらば……………	223
布林ディシから再びローマへ……………	229
フィレンツェのサン・マルコ修道院……………	238
ボルツァーノとドロミーテン・アルペン見物……………	242
“碧の海岸”サン・ラファエルからアヴィニョンへ……………	251
アヴィニョンとアルル行き……………	256
真打、ガール橋……………	262
あとがき……………	268
解説……………岡田喜秋……………	270
地図……………卷末……………	

地中海からの手紙

エジプトの驚異

一九五六年一月二十一日午後十一時

アテネ スタディオン街 メトロポール・ホテルにて

ぶどうを食べながら地中海第一報を送ります。さすがにディオニソスの国だけあって一月というのに生のぶどうが果実店で見つかったので、もちろん冷凍とは知りつつ買ってきたわけですが、その甘いことは実にすばらしい。みかん、オレンジの類が今の新鮮な果実ですが、これまたすこぶる優秀です。ただし、りんごは日本で見ない細長い貧弱なのしかないらしい。

エジプトでの一週間の旅を終え、昨日午後ここに落ち着いて、ほんとうにほっとした気持です。たしかにエジプトは驚異に値する国ですが、それは、私にとっては五〇パーセント悪い意味です。ソロンはアテネの政争にあきてエジプトに旅し、プラトンはあの古い先進国を訪れて知恵を磨いたかもしれませんが、私にとっては巨大な王権と来世信仰を示すばかりしく大きな遺物ばかりで、世界最大の神殿遺跡というカルナックの神殿以下の印象をいちいち記す気にはなりません。ピラミッドのような大きなものは、富士山と同じく近くで見るとただ巨石の壘積で、遠景のほうがよい。カイロの東部にある城山——^{シタデル}ファルークの王朝の王城のあったところ——を訪ねたとき、カ

イロ全市を近景としてナイル川のかなた、無限の沙漠^{さばく}を背景にサッカラの階段状ピラミッドとギゼーの三つのそれが、おりからの逆光線で青灰色に小さくならんでいたながめはまさに一幅の絵でした。この城跡では相当大きなモスク（回教寺院）も見物しましたが、有名なアル・アザールの大寺院は疲れたのでやめました。

有名なツタンカーメン王陵の出土品をはじめ、原始からローマ時代までの、おびただしい陳列品をもつエジプト博物館は到着第二日に五時間を費して見て回り、くたくたになりました。黄金をふんだんに使ったツタンカーメンの豪華な遺品よりも、私にはローマ時代のミイラの、顔の部分につけた板に描いた故人の肖像画のほうが興味がありません。現物の少ないギリシア系の絵画の遺品としてですが、そこには立体感を表わす技法は、すでに禿頭^{とくとう}の陰影などに立派に生まれています。本来のエジプトのものについては、一口で申せば多数の、しばしば恐ろしく巨大な彫刻や、かなり精巧な工芸品があり、美術の専門家の目には高く評価さるべきものも少なくないでしょう。ただ一言してよければ——個々の品にはフランス語で、きわめて詳細な解説がしてありますが、何々王朝と時代を示すのみで作者の名はいっこうに見当りません。

このへんで現在のカイロ、またエジプト民衆の——もちろん私のふれた限りの——印象に移ります。フェラー（古来の農民）の生活はいぜんとして、はなはだ低いものようです。ただいま麦が三寸くらいで、私は灌漑農業^{かんがい}の特色をみたかったのですが、ただ一つ気のついたのは、水路から一段高い畑への揚水に手でハンドルを回す揚水機が使われていることでした。これはカイロ

の西方、昔のメンフィスの地域（今は純農村）で自動車の上から二、三度みたもので、案内人のいうところでは、ごく近年のくふうだそうです。

カイロの街はいったいなんといったらよいか。市の東方の沙漠に接する飛行場からカイロにはいる間に過ぎるヘリオポリスの新住宅地は実に美しい洋風住宅のならぶ近代都市ですが、カイロの市街は——建物こそ高層建築が建ちならんでいます——うるさい物売り、屋台、雲助的案内人が多く、観光客を悩ませます。一步裏通りに出ると不潔で、なんとなくひとりで歩くのが気味が悪い。「城山」の帰りバスを間違えて本来のカイロ、いわゆる「旧カイロ」の場末をながめた印象も、日本の場末とはまたちよつとちがう荒涼としたものでした。何千年も専制王に搾取され、その後外国の支配下に圧迫されたエジプト大衆の貧困と無知は、はなはだ同情すべきですが、観光客に接する一部のエジプト人——下は雲助的案内人から、国家の免許証をもつ案内人、ホテルの番頭、交通公社にいたるまで、いかにして外人客から金を、形式的には合意の上で巻き上げるかに、日夜汲々としているありさまは予想以上でした。東洋やヨーロッパを回ったハーバード大学の卒業生ふたりと、階段状ピラミッドのあるサッカラの見物のとき親しくなりましたが、エジプトはおそらく世界最悪であり、日本はその点、実に立派だと評していました。日本についてはお世辞でなければ幸いです。

具体的に例を申しましょう。カイロの街に初めて出て、ものの十分もしないうちにたちまち怪しげな案内人にとっつかまりました。午後二時ごろのことです。そこに別の男が来て、この雲助

を追い払い自分は国家の免許証ある案内人だ、といって勧誘します。そしてこの男は毎日、旅館のロビーに現われて「お早ようございます」と愛想をふりまいて、今日はどこへ出かけるのか、午後は暇があるか、などとしつっこくたずねます。番頭にあればホテルの専属者かときくと、あれには困るが国家の免許を受けているので追い払えぬ、といいわけします。そしてこの番頭氏が、またなかなかのしたたかもので、到着第二日の午前に、私を航空会社の事務所に案内した足で「特別に安い」みやげ物店に連れて行き、一年ではすまなそうな旅行の第四日目にだいぶ値の張るおみやげを買わざるをえぬ破目におちいらせました。それはアレクサンドライトという貴石の指輪と腕輪で、こちらも度胸をきめて長旅の間には贈物に役に立つこともあろうと買ってしまいました。「私はギリシア人で名はテミストクレス」と名刺を出し、「あなたはテミストクレスを知っていますか」とたずねます。サラミスの戦いに巧みにクセルクセスを欺いて大勝に導いたというテミストクレス、偉大な政治家でありながら金銭に後めたいことがあって悲劇的な末路をたどったテミストクレスの後裔に、私のように善良なる旅行者がかなうはずはありません。

ルクソルはカイロから、ちようと東京から京都までくらい離れています。有名な「王陵の谷」やカルナックの神殿はやはり見てよかったと思いますが、テミストクレス氏が結託した（？）観光会社にまかせたのが失敗のもとか、カイロの二流ホテルの四日の宿賃より、ルクソルの一ばん安そうな宿の一泊と案内人の費用のほうが上とは腑に落ちず、たずねるとアブドル某とかいう有名なガイドが、あなたひとりを案内するので高いとの説明。さて現地に来てみると十人ばかりの

一行に入れられていた、というわけです。

木も草も一本もない荒涼たる岩山に作られた数々の王陵は、サッカラ付近のアピス聖牛のための恐ろしく大きな地下墳墓（サラペイオン）とともに、たしかに印象的でしたが、懐しく思い出されるのは、この王陵の谷見物の同行者たちでした。とても人のよいブリュッセルの商人の父子、パリの婦人ふたりと私とが、王陵見物をすませて、椰子の木立の中にある観光客用の食堂で一つテーブルを囲み宿屋仕出しの弁当を食べ、ビールに渴をいやしました。

案内人の中で第一級の「名人」アブドル某は王陵の谷のときだけでしたが、これは客の顔ぶれに応じ、仏、英、独、伊語でやります。エジプトの一月といえば観光のベストシーズンで観光客も色とりどりですが、何かフランス人がなかなか多いようでした。そしてここでもフランス語がそうとうに幅をきかせています。

ミスライル社の飛行機で早朝、麦畑の中のルクソル飛行場に着いたときの「春の曙^{あけぼの}」の美しさ、白い三角帆の往来するナイルのかなたに王陵の谷をその懷にいだいて横たわる断崖のながめ、それから赤く大きな三日月が、黒くゆうゆうと流れるナイル川に影をうつしつつ地平線におちていった夜十時ごろの不思議な美しさ、ルクソルはやはり行ってよかったと思います。

回教やアラブ問題の専門家にとっては、カイロはまさにメッカでありましょうが、コンミッシェンをとるために人々が好んで両替をさせたがるこの都は、私にとってはどうも長くいる気のせぬところでした。ちょうど共和制の憲法発布祝典でナセルがラジオで長々と演説するのが宿屋に

も聞えてきました。たしかにエジプトは変りつつある。しかし「あの連中」の精神がなおらぬ限り観光者にとっては共和制も王制も同じでしょう。

そんなわけで二十日の朝TWA機がカイロから飛び立ったとき、何か救われたような気持がしました。「山城屋」と「いか銀」での「坊っちゃん」——まあ、だいたいそんなところだったかなど苦笑しながら、この一週間を回顧しました。飛行機はナイル三角州（デルタ）の実に広大平坦な麦畑を北に進んでいます。ちぎって投げたような白雲が一望緑色の麦畑に影を落し、点々と散在する農村をつなぐ運河までよく見えます。むさぼるようにカメラのシャッターを切るうちに地中海に出ました。途中左手に雪をいただくクレタのダイクテ山をながめて、午後一時ごろ無事にヒメットス山下のアテネ飛行場に着きました。

あいにくギリシアへの第一歩の昨日は雲が深く有名な「視界」はぜんぜんだめでしたが、飛行場から波打ちぎわにそって市街中心のシンタグマ（憲法）広場にいたる「ギリシアの玄関」はまことに美しい。カイロで知り合ったアメリカ人が、安くて清潔と教えてくれたオモニア広場近くのこの宿に落ち着き、一休みの後、唯一の日本人——イタリア大使館から派遣されている一等書記官T氏——を宿の主人の調べてくれた怪しげな宛名で訪ねてみました。トロリーバスに乗って、外国語のできそうな若い娘に道をきいたところ、幸いに私の目的地の近くに行くところだったので、きわめて親切に案内してくれました。リカベットス山下の静かな住宅地を歩きながら、彼女の私に向けた質問は「あなたの宗教は何か」でした。お葬式の時だけ仏教という返事は、よく

納得できなかった様子です。この娘は「私はキプロス事件以来英語はいやになった」と申すのでドイツ語で道々しゃべりました。一般のギリシア人の間での反英感情まだいぶ強いようです。

T氏の占領しているアパートの階段が真っ白の大理石なのにびっくりしましたが、ここでは大理石のほうが他の材料より安いという同氏の話に帰路注意してみると、普通の建築に実に多く大理石が使われています。カイロのアラビア文字とちがい、ここの文字は看板にせよ、宿屋内の注意書にせよ、だいたい意味がわかるのですと気楽です。しかし話してる言葉はほとんどわかりません。

明日は日曜でアクロポリスはこむ由なのであわてて行くことはやめ、天気がよければ、もと日本の名誉領事だったという親日家S氏の招待で、T氏とともにアッティカ南端のスニオンの岬にまいる予定です。